

16 いつの間にか福祉の世界へ

阿藤 広志（社会福祉法人すこやか会理事長）



福祉の道へたどり着くまで……………

私は名古屋市の小さな町工場の長男として生まれ、小学校のころまでは父親の町工場を継ぐものか疑いもしませんでした。しかし、高校の進路を決めるとき、外で大きな仕事をしたいと両親の反対を押し切り土木科へ進学。高卒で就職するより大学に行って四年間人生経験を積みたい（本音は四年間遊びたい）と思い、大学の土木工学科に進みました。

四十数年前の工業大学は男子学生ばかりで、なにが青春と考えることがしたいと思っていたとき、キャンパスカウンセラーをする学外サークルから、女子大生と一緒に活動できるよと誘われ、即答で入部を決めました。

た。夏休みのキャンプシーズン前の研修で、ノーマライゼーションの「社会的弱者の方も一般市民と同等の生活と権利が保障されなければならない」という考え方に衝撃を受け、はじめて、「だれもが幸せな人生を送ること」を重要なテーマとして考えはじめました。

サークル活動で感じた人と関わることで
得られる幸せ……………

子ども会や障害者団体のキャンプカウンセラーとしてサークルの仲間とともに活動を重ねるなかで、今まで感じたことのない共感できるよるこびや成し遂げる達成感など、人と関わることで得られる幸せに感動していました。この体験から私は、教育・福祉の人相手

の仕事が進むべき道だと決め、卒業後は、専攻した土木建設関係の会社に二年間在籍し、土木事業に必要な資格をすべて取得し退職（この二年間は、学費を出してくれた両親への自分なりの恩返しとお礼として）。

それから、学童保育で働きながら通信教育で小学校教諭をめざしましたが、採用試験に二回失敗。そんな状況でも将来にまったく不安を感じていない私は妻に結婚を申し込みましたが、将来の見通しが甘すぎると妻の両親に反対されました。人相手の仕事につき、かつ結婚も認めてもらうには、採用試験がない福祉職への方向転換が一番の近道だと思い、愛知県豊橋にあるS社会福祉法人に就職し、結婚も許されました。

福祉職として私にできることは……………

やっとたどり着いた社会福祉法人ですが、この法人の仕事だけでは、人権を守りだれもが幸せな生活を送れるための実践がしたいという私の思いは満たすことができませんでした。そんなとき、民主団体の「三河健生会」によるボランティア団体「豊橋高齢者福祉をすすめる会」を知り、その活動に飛びつきました。

介護保険実施前のこの活動は、公的なサービスではおぎなえない支援の提供を、利用する側と援助する側

が同じ立場で活動しており、この活動にボランティアとして関わることで自分の生き方をなぐさめていたような気がします。そのなかで、三河健生会による福祉施設をつくる市民運動に私も参加し、一九九五年「ケアハウス・デイサービスセンターすこやかの里」が完成。私もそこに就職し、現在に至っています。

すこやかの里に来て二七年が経ちました。立場は変わりりましたが、今でも「一人でも多くの方に幸せを届けたい」という思いは変わりません。現場のころも管理者になっても、さまざまな課題が現れます。そのつど、成功のポイントを探りながら、関係する仲間と時勢のなかで解決してきました。

しかし、制度改定のために市民本位の立場から離れていく社会保障のなかで、利用者にとっても施設にとっても、深刻な問題が山積みです。法人単体では力が及ばない課題も、21・老福連と社会福祉経営全国会議とともに、この状況から目をそらさず、だれもが安心して暮らせる社会保障制度の抜本的改善を発信できることは、私たちの役目ではないかと思っています。だれもが幸せになるために平和を求め、関わるすべての方を認め、受けとめた実践をくり返しながら、この風の時代を進んでいきたいと思っています。